

Grit を伸ばす要因の検討 —興味の一貫性と努力の粘り強さに着目して—

Investigation of factors to extend Grit —Focusing on consistency of interest and perseverance of effort—

小助川 瑠 偉

問題と目的

学業や仕事などにおける達成の要因として、知能以外のパーソナリティ特性の役割があらためて注目されている (Tough, 2013)。個人差研究の先駆者 Galton は傑出した業績を残した個人の事例研究を通して、Self-denial (自制・自己コントロール) と Zeal (熱意) の 2 特性を達成の要因として挙げた (Duckworth & Gross, 2014)。自己コントロールおよびこれを中核とする性格特性である誠実性に関しては、様々な領域での達成に貢献する、重要な要因であることが広く認識されるようになってきている (Nettle, 2007; Tangney, Baumeister, & Boone, 2004)。一方、熱意に関しては、無断欠席や燃え尽き症候群などの否定的な結果を防ぎ、精神的健康に寄与する特性とされている (Greenglass, 2006)。Duckworth, Peterson, Matthews, & Kelly (2007) は、Galton の研究を受け、長期的な取り組みを必要とする目標達成のためには、誘惑を避けて目標からそれない自己コントロールだけでは不十分であり、困難を越えて目標を追求する熱意も必要であると指摘した。そして、両者をあわせた特性を Grit (やり抜く力) と名付け、その個人差を測定する尺度を開発した (雨宮・西川・奥上, 2015 による)。

Grit 尺度は 12 項目からなり、下位尺度には、興味の一貫性 (Consistency of Interest) と、努力の粘り強さ (Perseverance of Effort) がある。通常は両者の合計が Grit 尺度得点として使われ、下位尺度の得点は使われない。Grit 尺度得点は、GPA や SAT などの学力成績との正の相関やスペルリングコンテストでの優勝、米国陸軍士官学校を中退率など、様々な領域において、長期の達成を予測することが示されている (Duckworth, et al., 2007)。また、日本においては、樋口・竹橋・渡辺・尾崎・豊沢 (2016) が自身の作成した邦訳版 Grit 尺度を用いて、Grit がその他の要因よりも教育大学生の教員採用試験への合格率を予測することを明らかにしている。このように、Grit が長期の達成を予測する重要な要因であることは、国内外の研究から明らかになっている。

次の段階として、教育や企業における実践に発展させるためには、Grit をいかに伸ばすかを考えなくてはならない。しかし、現状では、国内外含め Grit を伸ばす要因を検討した研究はほとんど見当たらない。そんな中、Grit を提唱した Duckworth, A. L. が自身の研究やインタビューの経験を元に Grit を伸ばす要因について仮説を立てており、その内容が Duckworth, A. L. (2017 神崎訳, 2016) にまとめられている。以下に、その要因を紹介する。

Gritを伸ばす要因は全部で4つ挙げられている。1つ目は「ニュアンスへの興味」である。興味には、単純に新しいものや初めて見たものに抱く興味と、1つの物事を追及していく中で生じる微妙な差異（ニュアンス）に抱く興味の2種類がある。後者は、スポーツ選手や研究者など、特定の領域を極めているような人を思い浮かべるとイメージしやすいだろう。Duckworth, A. L.はこのような「ニュアンスへの興味」によって、一つの物事に興味を持ち続けることができる、つまり「興味の一貫性」につながると述べている。

2つ目は「楽観主義」である。楽観主義者と悲観主義者では、失敗や困難に対する原因帰属に違いがあり、前者は「外的」で「一時的」で「特定の」な原因に帰属するが、後者は「内的」で「永続的」で「不特定」な原因に帰属する。言い換えると、楽観主義者は変容可能な原因に帰属するが、悲観主義者は変容不可能な原因に帰属するということになる。ここから、Duckworth, A. L.は「楽観主義者」は失敗や困難に直面しても何とかできると考え、再び問題に対処しようとする、つまり「努力の粘り強さ」につながると述べている。

3つ目は「成長思考」である。知的能力に対する考え方には、知的能力は自分しだいで変えられると考える「成長思考」と、自分の力では変えることができないと考える「固定思考」の2種類がある。両者では挫折後の反応が異なり、前者は「努力すればきっと上手くできるはず」と考え再び問題に取り組もうとするが、後者は「自分には才能・能力がない証拠だ」と考え諦めてしまう。ここから、Duckworth, A. L.は「成長思考」の人は挫折しても再び問題に取り組もうと努力する、つまり「努力の粘り強さ」につながると述べている。

4つ目は「賢明な育て方」である。子育ては「支援の多さ」と「要求の厳しさ」の2水準から4タイプに分類することができる。こ

のうち、支援が多く、要求が厳しい育て方を「賢明な育て方」といい、賢明な育て方をされた子どもは他の育て方をされた子どもに比べ、学校の成績がよく、自主性が強く、不安症やうつ病になる確率や非行に走る確率が低いなど、あらゆる面で優れていることが明らかになっている。ここから、Duckworth, A. L.は探索的にはあるが、賢明な育て方をされた子どもはGritも高くなるのではないかと述べている。

Grit自体を伸ばす要因を検討した研究がほとんどない現状を考えると、上記の4つの要因を検証することは意義のあることと考えられる。しかし、本書は一般向けの図書であるため科学的な根拠や引用文献などが載っておらず、各々の要因を測定する方法が示されていない。そこで、本研究ではDuckworth, A. L.の記述に近い心理学の概念を探し、その概念とGritの関連を検証していく。以下に、本研究で用いる概念を紹介し、Duckworth, A. L.の記述と併せて、本研究の仮説を述べる。

まず1つ目の「ニュアンスへの興味」に対応する概念として「知的好奇心」を紹介する。好奇心は“新奇な対象への探索を動機づける本能”と定義づけられており（James,1890）その中でも、知的活動を動機づける好奇心が「知的好奇心」と定義づけられている（Berlyne, 1960）。また、知的好奇心には、新奇な情報や知識を求めて方向性を定めずに行う探索行動を動機づける「拡散的好奇心（diversive curiosity）」と、矛盾あるいは不整合に対して方向性を定めて行う探索行動を動機づける「特殊的好奇心（specific curiosity）」の2種類がある（Berlyne, 1960）。概念を照らし合わせると、「特殊的好奇心」はDuckworth, A. L.の述べる「ニュアンスへの興味」と似た概念であり、「興味の一貫性」につながると考えられる。以上より、1つ目の仮説は「特殊的好奇心が高い人は、興味の一貫性も高くなる」とする。

次に2つ目の「楽観主義」に関しては、Seligman (1991) が Duckworth, A. L. の記述と同様に、原因帰属から「楽観性」を定義しているため、この概念を用いる。以上より、2つ目の仮説は「楽観性が高い人は、努力の粘り強さも高くなる」とする。

次に3つ目の「成長思考」と対応する概念として「暗黙の知能観」を紹介する。暗黙の知能観とは、「知能とは何かという問いに対する個人の解答」を指し（上淵, 2003）、知能は柔軟なもので、自身の努力によって成長させることが可能と考える「増大的知能観」と、知能の量は固定的で、自身での制御は困難であると考え「実体的知能観」の2種類に分類される（Dweck & Leggest, 1988）。概念を照らし合わせると、「増大的知能観」は Duckworth, A. L. の述べる「成長思考」と似た概念であり、「努力の粘り強さ」につながると考えられる。以上より、3つ目の仮説は「増大的知能観を持つ人は、努力の粘り強さも高くなる」とする。

最後に4つ目の「賢明な育て方」に対応する概念については適当な概念が見つけれなかったため、Duckworth, A. L. (2017 神崎訳, 2016) で紹介されている「育て方診断テスト」の質問項目を用いて測定し、Gritとの関連を検討することとする。この尺度は支援の多さと要求の厳しさを表す項目から構成されており、それぞれの得点の高・低から子育てのタイプを分類する。そのため、賢明な育て方は、支援の多さ得点も要求の厳しさ得点も高い群ということになる。また、Duckworth, A. L. の記述からは賢明な育て方がGritの下位尺度のどちらに影響するのか判断できなかったため、本研究では言及せず、興味の一貫性と努力の粘り強さのどちらか一方、もしくは両方を高めるとする。以上より、4つ目の仮説は「支援が多く要求も厳しい育て方をされた人は、興味の一貫性と努力の粘り強さのどちらか一方、もしくは両方が高くなる」とする。

本研究では、上記4つの仮説を検証することを目的とする。また、先行研究ではGritを下位尺度別に検討したものは見当たらないが、元々Grit自体が2つの特性を合わせた概念であること、下位尺度の「努力の粘り強さ」と「興味の一貫性」の因子間にはほとんど相関が見られない ($r=-.15$) (樋口ら, 2016) ことから、Gritを伸ばす要因を検討するには下位尺度別に扱うことが望ましいと考えられる。そこで、本研究では「興味の一貫性」を伸ばす要因と「努力の粘り強さ」を伸ばす要因に分けて検討していく。以下に、本研究の最終的な目的と仮説をまとめる。

本研究の目的と仮説

本研究の目的は、以下4つの仮説を検証することで「Gritを伸ばす要因について検討すること」である。その際、「興味の一貫性」を伸ばす要因と「努力の粘り強さ」を伸ばす要因に分けて検討していく。

- 仮説1 特殊的好奇心が高い人は、興味の一貫性も高くなる
- 仮説2 楽観性が高い人は、努力の粘り強さも高くなる
- 仮説3 増大的知能観を持つ人は、努力の粘り強さも高くなる
- 仮説4 支援が多く要求も厳しい育て方をされた人は、興味の一貫性と努力の粘り強さのどちらか一方、もしくは両方が高くなる

方法

1. 調査時期および対象者

2017年5月中旬～6月下旬にかけて、4年制教育大学の学生170名を対象に質問紙調査を行った。対象者の内訳は、男性80名、女性90名、平均年齢は19.59歳 ($SD=1.24$) であった。

2. 質問紙構成

1) フェイスシート

対象者の傾向を把握するため、性別（男、女）、年齢、学年について尋ねた。

2) 邦訳版Grit尺度（樋口ら, 2016）

この尺度はDuckworth, et al. (2007) が作成したGrit Scaleを邦訳したもので、全12項目、5件法である。また、「興味の一貫性」、「努力の粘り強さ」からなる2因子構造であることが確認されている。

3) 知的好奇心尺度（雨宮・西川, 2015）

この尺度は、個人特性としての「拡散的好奇心」と「特殊的好奇心」を測定することができる。全12項目、5件法であり、2因子構造であることが確認されている。

4) 育て方診断テスト（Duckworth, A. L., 2017 神崎訳, 2016）

全15項目で、「支援の多さ」と「要求の厳しさ」を表す質問項目で構成されている。Duckworth, A. L. (2017 神崎訳, 2016) では「あてはまる」「あてはまらない」の2択で掲載されていたが、回答に幅をもたせるために本研究では5件法とした。

5) 暗黙の知能観尺度（及川, 2005）

この尺度はHong, Chiu, Dweck, Lin, & Wan (1999) で用いた項目を翻訳したもので、個人の知能観が「増大的（変容可能と考える）」か、「実体的（変容不可能と考える）」かを測定することができる。全3項目、6件法であり、単因子構造であることが確認されている。なお、及川（2005）は、intelligenceを才能と翻訳したが、才能という表現を用いた場合、個人により想像する領域が異なる可能性がある（ex. 運動能力・知的能力・芸術など）という藤井・上淵（2010）の指摘に基づき、本研究においても才能ではなく知能という表現を用いた。

6) 帰属スタイル質問票（井田・渡辺, 2006）

この尺度は、Seligman (1991) を翻訳し

た山村（1994）の項目を参考に、現代の日本人の生活様式を考慮して作成したものである。架空の良い出来事・悪い出来事に対して、個人がどのように原因を帰属するか測定し、その傾向から個人の楽観性を測定することができる。なお、本研究では調査対象者の負担を考慮し、オリジナル48項目から、より大学生に馴染みのある出来事18項目を用いた。回答形式は、提示された架空の出来事に対して自分の考え（原因帰属）により近い方をAかBの文章から2択で選択させた。

7) センター入試得点

Gritは知能と相関がないという結果（Duckworth, et al., 2007, 樋口ら, 2016）を再検証するために、大学に入学した年のセンター試験の得点について回答を求めた。回答形式は、「1. 399点以下」「2. 400点～449点」―「9. 750点～799点」「10. 800点以上」というように50点刻みの1～10の中からあてはまる得点に○をつけさせた。なお、答えたくない場合や受けていない場合、記憶にない場合は空欄にするよう説明した。

3. 倫理的配慮

調査への参加は自由であること、回答は統計的に処理され匿名性が保持されることを質問紙の表紙に明記し、調査実施に先立って口頭でも説明した。

結果

1. 変数の測定

まず、樋口ら（2016）の因子分析の結果を再検証するため、改めて邦訳版Grit尺度の12項目について主因子法による因子分析を行った。固有値の変化（2.99, 1.98, 1.12, …）と因子の解釈可能性を考慮すると、2因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度2因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、概ね樋口ら（2016）と同様の因子構造になったが、75“数ヶ

表1 邦訳版Grit尺度の因子分析結果

	因子	
	1	2
努力の粘り強さ ($\alpha = .74$)		
80 始めたことは、どんなことでも最後までやりとげる	.67	-.08
78 私は頑張り屋だ	.65	.04
72 私は精魂傾けてものごとに取り組む	.62	.15
74 重要な試練に打ち勝つため、困難を乗り越えてきた	.54	.00
82 困難があっても、私はやる気を失わない	.50	-.02
75 数ヶ月以上かかるような計画に集中して取り組み続けることは難しい (*)	-.46	.30
76 数年にわたる努力を要する目標を達成したことがある	.36	-.08
興味の一貫性 ($\alpha = .59$)		
77 私の興味は年々変わる (*)	.12	.75
81 数ヶ月ごとに新しい活動への興味がわいてくる (*)	.15	.62
73 あるアイデアや計画に一時的に夢中になっても、あとで興味を失うことがある (*)	-.12	.37
79 目標を決めても、後から変えてしまうことがよくある (*)	-.23	.34
71 新しいアイデアや計画によって、それまで取り組んでいたことから注意がそれることがある (*)	-.13	.32
累積寄与率 (%)	19.32	30.74

注) (*) は逆転項目として処理した。

月以上かかるような計画に集中して取り組み続けるのは難しい”が、樋口ら (2016) では興味の一貫性因子に含まれていたが、本研究では努力の粘り強さ因子に含まれた。しかし、因子間の負荷量の差が.1以上かつ、因子負荷量が.30以上であったため、本研究ではそのまま分析を行った。回転後の最終的な因子パターンを表1に示す。なお、回転前の2因子12項目の全分散を説明する割合は30.74%で、因子間相関は.08であった。

内的一貫性を検討するため、Cronbachの α 係数を算出したところ、努力の粘り強さで $\alpha = .74$ 、興味の一貫性で $\alpha = .59$ と興味の一貫性においては低い値であったが、努力の粘り強さにおいては概ね十分な値が得られた。次いで各因子項目の平均値を算出し、それぞれ「興味の一貫性」得点、「努力の粘り強さ」得点とした。いずれも得点が高いほど、その傾向が強いことを意味する。

次に、育て方診断テストは一般向けの図書から引用した項目であり、因子分析や信頼性分析が行われていない可能性がある。そこで、育て方診断テストの15項目について主因

子法による因子分析を行った。固有値の変化 (3.75、1.94、0.95、…) と因子の解釈可能性を考慮すると、2因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度2因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。そして、因子間の負荷量の差が.1未満もしくは、因子負荷量が.30未満であった4項目を削除し、残りの11項目に対して再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。回転後の最終的な因子パターンを表2に示す。なお、回転前の2因子で11項目の全分散を説明する割合は40.99%で、因子間相関は.27であった。

第1因子には支援の多さを表す7項目が、第2因子には要求の厳しさを表す4項目が高い負荷量を示した。そこで、順に「支援の多さ」因子、「要求の厳しさ」因子と命名した。

内的一貫性を検討するため、Cronbachの α 係数を算出したところ、支援の多さで $\alpha = .83$ 、要求の厳しさで $\alpha = .65$ と要求の厳しさにおいてはやや低い値であったが、支援の多さにおいては十分な値が得られた。次いで、各因子項目の平均値を算出し、それぞれ「支

表2 育て方診断テストの因子分析結果

	因子	
	1	2
支援の多さ ($\alpha=.83$)		
47 親は私の悩み事を聞いてくれない (*)	.75	.01
38 困ったときには、親を頼りにできる	.73	.07
44 私は親と一緒に楽しいことをして過ごす	.67	.03
45 親は私のプライバシーを尊重してくれる	.64	-.23
41 親は私との会話の時間をつくってくれる	.61	.21
39 親は、私にも自分の意見をもつ権利があると思っている	.60	-.18
50 私がんばっても、親はほとんどほめてくれない (*)	.54	.03
要求の厳しさ ($\alpha=.65$)		
43 親は私が悪いことをしても叱らない (*)	.08	.64
40 親は私に家族のルールに従うことを求めている	-.15	.62
49 まちがったことをしても、親から罰を与えられることはない (*)	-.13	.57
46 親は「こうすればもっとよくできるはずだ」という方法を指摘する	.23	.45
累積寄与率 (%)	29.13	40.99

注) (*) は逆転項目として処理した。

表3 各尺度の平均値と標準偏差

	興味の 一貫性	努力の 粘り強さ	拡散的 好奇心	特殊的 好奇心	要求の 厳しさ	支援の 多さ	暗黙の 知能観	楽観性	センター 得点
<i>N</i>	169	169	169	170	170	163	165	158	151
<i>M</i>	2.38	3.40	3.61	3.46	3.62	4.16	3.46	-1.23	6.14
<i>SD</i>	0.65	0.66	0.77	0.75	0.81	0.71	1.28	1.20	1.33

援の多さ」得点、「要求の厳しさ」得点とした。いずれも得点が高いほど、その傾向が強いことを意味する。

その他の尺度については先行研究に倣って、各尺度の得点を算出した。なお、「暗黙の知能観」得点は、得点が高いほど「増大的知能観」を、得点が低いほど「実体的知能観」

を意味する。それ以外の尺度は、得点が高いほど、その傾向が強いことを意味する。各尺度の平均値と標準偏差を表3に示す。

2. 各尺度得点の相関

各尺度得点間の相関係数を算出した。結果を表4に示す。興味の一貫性と努力の粘り強さとの間、努力の粘り強さと拡散的な好奇心、

表4 各尺度間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. 興味の一貫性	—	.168*	-.457**	-.133	-.144	-.056	-.119	-.009	-.001
2. 努力の粘り強さ		—	.312**	.256**	-.029	.093	-.144	-.130	-.013
3. 拡散的な好奇心			—	.487**	.002	.069	-.069	-.014	-.051
4. 特殊的好奇心				—	.042	.072	-.013	-.108	.101
5. 要求の厳しさ					—	-.183*	-.008	-.100	-.019
6. 支援の多さ						—	.142	.137	.199*
7. 暗黙の知能観							—	-0.30	.003
8. 楽観性								—	-.041
9. センター得点									—

* $p<.05$, ** $p<.01$

表5 重回帰分析の結果

説明変数	興味の一貫性	努力の粘り強さ
拡散的好奇心	-.53**	.15
特殊的好奇心	.18*	.24**
暗黙の知能観	.09	.21*
楽観性	.00	.15 ⁺
センター得点	-.07	-.02
R^2	.22**	.17**

⁺ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

表6 分散分析の結果

支援の多さ 要求の厳しさ	高群		低群		主効果		交互作用
	高群	低群	高群	低群	支援の多さ	要求の厳しさ	
興味の一貫性	2.24 (0.71)	2.46 (0.63)	2.33 (0.40)	2.50 (0.71)	0.23	2.96 ⁺	0.20
努力の粘り強さ	3.44 (0.73)	3.60 (0.57)	3.27 (0.60)	3.32 (0.68)	4.29*	0.88	0.21

上段：平均値，下段：標準偏差

⁺ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

特殊的好奇心との間、拡散的好奇心と特殊的好奇心との間、支援の多さとセンター得点との間に有意な正の相関が認められた。また、興味の一貫性と拡散的好奇心との間、要求の厳しさと支援の多さとの間に有意な負の相関が認められた。

3. Gritに影響する要因の検討

各尺度得点がGritに与える影響を検討するために、興味の一貫性を従属変数、努力の粘り強さを従属変数とし、それぞれ重回帰分析を行った。結果を表5に示す。

興味の一貫性に対しては、特殊的好奇心から正の標準回帰係数、そして拡散的好奇心から負の標準回帰係数が有意であった。努力の粘り強さに対しては、特殊的好奇心と暗黙の知能観から正の標準回帰係数が有意、そして楽観性から正の標準回帰係数が有意傾向であった。また、センター得点から有意な標準回帰係数は認められなかった。

なお、VIFは全て2以下であり多重共線性の問題が無いことが確認された。

4. 子育てのタイプによるGrit得点の差

まず、支援の多さと要求の厳しさ得点の中央値を基準に「支援の多さ高群・低群」と「要

求の厳しさ高群・低群」に分類した。そして、支援の多さ（高・低）と要求の厳しさ（高・低）を説明変数、興味の一貫性得点と努力の粘り強さ得点を従属変数とした2×2の分散分析を行った。結果を表6に示す。なお、支援高・要求高群42名、支援高・要求低群は38名、支援低・要求高群は32名、支援低・要求低群は55名であった。

分散分析の結果、興味の一貫性においては、要求の厳しさの主効果のみ有意傾向であり、努力の粘り強さにおいては、支援の多さの主効果のみ有意であった。いずれも有意な交互作用はみられなかった。

考察

まず、Gritの下位尺度である「努力の粘り強さ」と「興味の一貫性」の因子間の相関を求めた結果、ほとんど相関が見られず（ $r = -.08$ ）、樋口ら（2016）と一致する結果が得られた。これより、Gritの下位尺度を独立した変数として扱い、検討することの妥当性が高められた。また、センター試験得点とGritの各下位尺度との間には、有意な影響関係も

有意な相関関係も認められなかった。これより、Gritは知能と関連しないという先行研究の結果の信頼性が高められた。

次に、各尺度がGritに及ぼす影響を検討するため重回帰分析を行った結果、特殊的好奇心が興味の一貫性を高める働き、暗黙の知能観（増大的知能観）が努力の粘り強さを高める働きが認められた。これより、本研究の仮説1、3は支持されたとと言える。この2つの要因に関しては、Gritを伸ばす具体的な介入方法として、今後の展望にて詳しく考察していく。

一方で、楽観性が努力の粘り強さを高める働きは有意傾向に留まった。これより、本研究の仮説2は支持されなかった。有意傾向に留まった原因として、測定方法が考えられる。帰属スタイル質問票（井田・渡辺, 2006）では48項目であったところを、本研究では被験者の負担を考慮し18項目に減らしている。それにより、Seligman (1991) が定義した楽観性の内容を正確に反映できていない可能性が考えられる。今後は、オリジナル48項目、もしくは他の楽観性を測定する尺度を用いて、再度Gritとの関連を検証することが求められる。

また、仮説にはない影響関係も見られた。まずは、特殊的好奇心が努力の粘り強さを高める働きが認められた。つまり、特殊的好奇心にはGrit全体を高める働きがあるということになる。挫折や失敗を言い換えると、“自分が今までやってきたこと（経験）と結果との間に矛盾が生じた状態”といえる。そのため、矛盾について探求したいという意欲（特殊的好奇心）が強いと、挫折や失敗が無気力につながることなくさらなる探究心につながるため、粘り強く努力できると考えられる。

一方で、拡散的好奇心が興味の一貫性を抑制する働きが認められた。拡散的好奇心は方向性を定めない探索行動を動機づけるため、目新しい対象に興味が移ってしまい、一つの

目標や活動に興味をもち続けることを妨げると考えられる。この2種類の知的好奇心は相関も高く、一緒くたに扱う研究も多い。しかし、拡散的好奇心と特殊的好奇心が興味の一貫性に対して、真逆の方向に影響することを考えると、Gritとの関連を考える際には、特にこれら2種類の知的好奇心を区別して扱うことが求められる。

子育てのタイプがGritに及ぼす影響を検討するために分散分析を行った結果、交互作用はみられず、要求の厳しい子育てをされると興味の一貫性が低くなる傾向と、支援の多い子育てをされると努力の粘り強さが高くなる効果が示唆された。この結果から、仮説4は棄却された。

まず、支援の多さ単独では、努力の粘り強さを高める効果が示唆された。項目内容を見ると「ほめてくれる」「頼りにできる」といった心理的なサポートを表す内容が多い。ここで、親子関係においてサポートすることが重要なのか、サポートされる行為自体が重要なのかについては、本研究では判断しかねる。そのため、今後は対象を絞らずにソーシャルサポートとGritとの関連を検討することが求められる。

一方で、要求の厳しさの主効果は有意傾向に留まり、さらに興味の一貫性を低める方向に働いていた。そのため、要求の厳しさはGritとは関連がない、もしくは逆効果を及ぼすと考えられる。単純に要求が厳しくない方が興味の一貫性が高まるということであれば、今後は子どもの自主性を重んじるような養育態度とGritとの関連を検討することが求められる。しかし、要求の厳しさに対する受け取り方には、欧米圏と日本で文化差がある可能性が考えられる。仮に、日本において厳しい育て方がネガティブに受け取られた場合には、それが結果に影響しているかもしれない。今後は文化差も考慮したうえで検討を進める必要がある。

また、育て方診断テストの質問項目は、一般向けの図書に載っているテストの項目内容をそのまま引用したものである。そのため、先行研究で信頼性・妥当性が確認された尺度ではない。本研究においても、いくつかの項目で天井効果がみられるなど、信頼性・妥当性において疑問が残る点が認められたため、本研究の結果を鵜呑みにすることはできない。今後は、項目の文章表現・内容・尺度構成を吟味し尺度の信頼性・妥当性を高める、もしくは、定義に合う他の尺度を用いるなどして、再度子育てとGritとの関連を検討することが求められる。

今後の展望

本研究では、Gritを伸ばす要因について仮説を立て検証した。その際Gritの下位尺度を独立した変数として扱い、各々に影響する要因を検証した。しかし、いくつかの点で課題が挙げられる。

第一に、重回帰分析の決定係数が「興味の一貫性」において.22、「努力の粘り強さ」において.17と、共に低い値に留まったことである。このことから、今回検証した要因以外の未知の要因の方がGritを説明する割合が多いということになる。そのため、今後も引き続き、Gritを伸ばす要因を検討していくことが求められる。

第二に、邦訳版Grit尺度の信頼性・妥当性の問題である。本研究では、樋口ら(2016)と各因子に割り当てられる項目が異なった。また、因子負荷量が.30～.40と低い値の項目もいくつかあり、努力の粘り強さにおいては α 係数も低い値に留まった。今後は、邦訳版Grit尺度の再検証も求められる。

また、Gritを伸ばす要因の次の段階としては、Gritを伸ばす具体的な介入方法の検討が求められる。本研究では、特殊的好奇心と暗黙の知能観(増大的知能観)がGritを伸ばす

要因として示唆された。そこで、以下に今後の介入方法の展望について、筆者の考察を述べる。

まず特殊的好奇心について。波多野・稲垣(1973)によると、特殊的好奇心は外部情報と内部情報間のズレ、もしくは内部情報間の不整合を経験することで喚起される。そのため、特殊的好奇心を喚起するためには、まず外部情報とのズレや内部情報間の不整合に「気づく力」が必要になる。そこで、課題を実行している最中の自分の認知状態を監視する力である「メタ認知的モニタリング」を育てることで、内部情報と外部情報、内部情報間を照らし合わせることができ、ズレや不整合に気づくことができると考えられる。その結果、特殊的好奇心を喚起しやすくなり、Gritを高められるのではないかと考えられる。

次に暗黙の知能観(増大的知能観)について。増大的知能観と実体的知能観では、困難の知覚や失敗の経験に対する「原因帰属」に違いがある。前者は、失敗や困難の原因を「自身の努力不足」に帰属し、以前とは異なる方略を用いた解決が動機づけられる。後者は、失敗や困難の原因を「自身の能力不足」に帰属し、後続の課題への動機づけが低下し、回避的になる(Dweck & Leggest, 1988)。つまり、失敗や困難に対する原因帰属を「能力不足」から「努力不足」に変えることができれば、努力の粘り強さを伸ばせると考えられる。

原因帰属を変える方法としては、Dweck(1975)による「再帰属訓練」が知られている。Dweck(1975)は、学業不振の原因を能力に帰属している学習者に再帰属訓練を実施することによって、失敗の原因を能力から努力に帰属するようになり、学習性無力感に陥った状態から脱却することを明らかにした。この再帰属訓練により、失敗や困難を経験した際の原因帰属を変化させることで、努力の粘

り強さを高められるのではないかと考えられる。

上記以外の介入方法も考えられるかもしれないが、いずれにせよ、Gritを伸ばす要因の検討と、具体的な介入方法の検討を併せて行っていくことが求められる。

付記

本論文は、2017年度北海道教育大学教育臨床専攻教育・発達心理分野において卒業論文として提出したものに加筆・修正を加えたものである。本論文の制作にあたり、ご指導いただきました北星学園大学牧田浩一先生、北海道教育大学戸田弘二先生、調査にご協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 雨宮俊彦・西川一二 (2015) 知的好奇心尺度の作成—拡散的好奇心と特殊的好奇心—. *教育心理学研究*, **63**, 412-425.
- 雨宮俊彦・西川一二・奥上紫緒里 (2015) 日本語版 Short Grit (Grit-S) 尺度の作成. *パーソナリティ研究*, **24** (2), 167-169.
- Berlyne, D.E. (1960) Conflict, arousal, and, curiosity. *New York*: McGraw-Hill.
- Duckworth, A. L. (2017) Why passion and resilience are the secrets to success. *Vermilion* (= 2016, 神崎朗子訳『やり抜く力—人生のあらゆる成功を決める「究極の能力」を身につける—』ダイヤモンド社.)
- Duckworth, A. L., Peterson, C., Matthews, M.D., & Kelly, D.R. (2007) Grit: Perseverance and passion for long-term goals. *Journal of Personality and Social Psychology*, **92**, 1087-1101.
- Duckworth, A. L., & Gross, J. J. (2014) Self-control and grit: Related but separable determinants of success. *Current Directions in Psychological Science*, **23**, 319-325.
- Dweck, C.S. (1975) The role of expectations and attributions in the alleviation of learned helplessness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 674-685.
- Dweck, C.S., & Leggett, E.L. (1988) A social cognitive approach to motivation and personality. *Psychological Review*, **95**, 256-273.
- 藤井勉・上淵寿 (2010) 潜在連合テストを用いた暗黙の知能観の査定と信頼性・妥当性の検討. *教育心理学研究*, **58**, 263-274.
- Greenglass, E. R. (2006). Vitality and vigor. In P. Buchwald (Ed.), *Stress and anxiety: Application to health, work place, community, and education*. Newcastle, UK: Cambridge Scholars Publishing. pp. 65-86.
- 波多野諠余夫・稲垣佳世子 (1973) 知的好奇心, 中央公論新社.
- 樋口収・竹橋洋毅・渡辺匠・尾崎由佳・豊沢純子 (2016) Grit尺度の邦訳および信頼性・妥当性の検討. *社会心理学会, 抄録集*.
- 樋口収・竹橋洋毅・渡辺匠・尾崎由佳・豊沢純子 (2016) 日本語版Grit尺度の信頼性・妥当性の検討. *グループダイナミクス学会*.
- Hong, Y., Chiu, C., Dweck, C. S., Lin, D. M., & Wan, W. (1999) Implicit theories, attributions, and coping: A meaning system approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, 588-599.
- 井田政則・渡邊智子 (2006) 楽観性・認知スタイル・抑うつに関する比較文化的研究. *立正大学心理学研究紀要*, **4**.
- James, W. (1890) The principles of psychology. *New York*: Holt.
- 松沼光泰・中山誠一 (2013) 再帰属訓練法は英語学習に対する自己効力感を向上させるか. *城西大学語学教育センター研究年報*, **7**, 23-32.
- Nettle, D. (2007) *Personality*. Oxford: Oxford University Press.
- 及川昌典 (2005) 知能観が非意識的な目標追及に及ぼす影響. *教育心理学研究*, **53**, 14-25.
- Seligman, M.E.P. (1991) *Learned Optimism*. *New York*: Alfred A. Knopf.
- Tangney, J. P., Baumeister, R. F., & Boone, A. L. (2004) High self-control predicts good adjustment, less pathology, better grades, and interpersonal success. *Journal of Personality*, **72**, 271-324.
- Tough, P. (2013) *How children succeed*. *New York*: Random House.
- 上淵寿 (2003) 達成目標理論の展望—その初期

理論の実際と理論的系譜—. 心理学評論, 43, 392-401.

上淵寿 (2004) 達成目標理論 上淵寿 (編) 動機付け研究の最前線, 北大路書房.

山村宣子 (1994) オプティミストはなぜ成功するか, 講談社.